

子供を元気にする。親も元気になる  
プレジデント  
**Family**  
プレジデントファミリー



地域が教室、働く人が先生  
「ソーシャルライアル」で  
未来の自分が見えてくる



広域通信・単位制高校が取り組む  
地域全体を**学校**と捉えた教育  
**コミュニティ共育**

地域との接点から生まれる  
「**斜めの関係**」が子供の成長に大切だ  
元杉並区立 和田中学校校長 **藤原和博**さん







# 地域社会は、街も人もすべてが教材 強く生き抜く人格は、そこから育つ

藤原和博さん 元杉並区立和田中学校校長

身近な地域を通して社会の仕組みを学ぶ「よのなか科」。教育改革を目指す藤原和博さんは、杉並区立中学の校長時代に導入して話題を呼んだ、この授業の普及に努めている。一方、第一学院高等学校では、`地域全体を学校と捉えた教育「コミュニティ共育」`を全国のキャンパスで展開している。今、キャリア教育が重視される理由と、そのあり方について藤原さんにうかがった。

## ハンバーガーを考えれば世界の経済と物流が見えてくる

「よのなか科」とは「身近なテーマを子供と一緒に考え、政治・経済現代社会の仕組みや営みを学ぶ授業」と藤原さんはいう。授業はグループワークを基本とし、ブレインストーミング、ロールプレイング、デイベート、プレゼンテーションというかたちで展開する。「皆でアイデアを出し、その当事者

の立場で意見を述べ合い、自分の考えを発表する。一般の教科のように解答や導き方を「教える」のではなく、正解のない課題について考えることがこの授業のねらいです」テーマも「ハンバーガー屋さんの店長になってみよう!」「中学生はもう大人?まだ子供?」「自転車放置問題を考える」など、子供の日常に即した事柄が中心。しかし、授業の内容容はとてつもない広がりを持つ。たとえば、ハンバーガーを題材にした授業。「街のどこに出店するか」

という課題に始まり、商品の原材料、原価について学ぶ。「ほとんどが輸入食材で作られているハンバーガーをひも解いていくと、世界規模の物流と経済が見えてくる」と藤原さん。しかも、どれが正解という正答のない授業だから、子供たちは臆せず自分の意見が述べられる。「最初は、ワークシートに一言も記入できなかった子でも、1年も経つと、自分からどんな発言するようになりますよ」という。

## 社会をよりよい方向へ積極的に変えていける感性を育てる

藤原さんは、2000年頃から「よのなか科」の授業を始めた。外部講師として招かれた足立区立第十一中学や向陽中学で実践し、校長を務めた杉並区立和田中学でも導入した。きっかけは、中学3年の公民の教科書を読んで「激怒した」とのこと。「公民は、政治、経済、現代社会を体系的に学ぶ教科。ところが、政治ならば国会の仕組みや議員定数、経済ならば貨幣の定義など、子供たちの生活実感からおよそかけ離れたところから説き起こされています。ここでは興味を持てない」会社勤めをしていれば一生安泰という時代は、とっくの昔に過ぎ去った。社会保障も、一〇〇兆円もの借金を抱える国に頼れない。これからの時代を生きる子供たちの将来にかかる負荷は大きい。「自分の生活基盤を自らの裁量でつくり、守ってゆける人間、自分を人生の主人公として、社会をよりよい方向に積極的に変えていこうという人間が育たなければ、日本は立ちいかない。今でこそ危機的な状況なのですから」と藤原さん。だから「身近なところから社会全体までがわかりやすく理解でき、社会に関心を持てる教育プログラムが必要」なのだという。それが「よのなか科」にかけた思いだ。授業は評判になり、生徒の数を上回るほどの参観希望者が押し寄せた。だが、それがむしろ授業を充実させていった。

## 人間関係に強い子を育む斜めの関係づくり

文科科学省が推進するキャリア教育は、望ましい職業観・勤労観、自身の進路を主体的に選択する力を育むことをねらいとしている。多くの学校が今、これに取り組み始めているが、「単なる調べ学習にとどまっているケースも多い」と藤原さんは指摘する。「世の中にどんな職業があるかを調べて、将来なりたい職業を選ばせる

というタイプの授業ですね。それだと「教える授業」とあまり変わりなく、「考える授業」にならないです」キャリア教育で大切なのは、体験的に社会を知ること、そして他者と刺激し合いながら創造性を発揮していきける学習環境だ。それが子供の社会性、コミュニケーション能力を高めていくことにつながる。なかでも藤原さんは先に触れた「地域との接点」を重視し「これを「斜めの関係づくり」と呼んでいる。「親と子、先生と生徒は縦の関係。対して近所のおじさん、おばさんと自分、街の商店主と自分のかかわりが「斜めの関係」。この斜めの関係のなかで採まることが、子供の成長にはとても大切です。多様な価値観に触れ、それに対処する経験を積みめば、ものごとを多面的に見て、考える力がついていきます」その力を藤原さんは「複眼的思考」と呼ぶ。ものごとを多面的にとらえる視点・思考は、自身の多面性を認めることでもある。自分のなかにあるさまざまな感情や考え、可能性と向き合えば、それは自己肯定感にもつながる。「斜めの関係は、家でいえば地震に強い筋違(すぢがひ)のようなもの」と藤原さんはいう。キャリア教育を通じて、地域の人々と触れ合うことが将来、社会に出たときに、人間関係の揺れに強い人格を形成することにもつながるのである。



ふじはらかずひろ  
1955年東京生まれ。東京大学経済学部卒業後、株式会社リクルート入社。1996年、同社初のフェローとなる。2003年より5年間、義務教育初の民間校長として杉並区立和田中学校校長を務め、さまざまなプロジェクトを立ち上げて話題に。現在も教育改革実践家として活動を広げている。著書に「校長先生になろう!」(日経BP)、「坂の上の坂」(ポプラ社)など多数。  
<http://www.yononaka.net/>



授業を終えて

## つくる人の思いがよくわかった



高校3年 小野口征吾さん  
将来、和食の料理人になりたいので、今日の授業が楽しかったです。話を聞いて、思いを込めて味噌をつくっていることがわかりました。職場の人たちが、楽しそうに仕事をしているのも印象的でした。

## ものをつくる仕事もおもしろそう

高校3年 国分沙織さん

「味噌づくりは人づくり」というお話、仕事を見学して実際にそうだなと思いました。将来は、カフェのようなお店で接客の仕事をしたと思っているのですが、ものをつくる仕事もおもしろそうだと感じました。



## 多くの人に「仕事の魅力」を尋ねてみたい

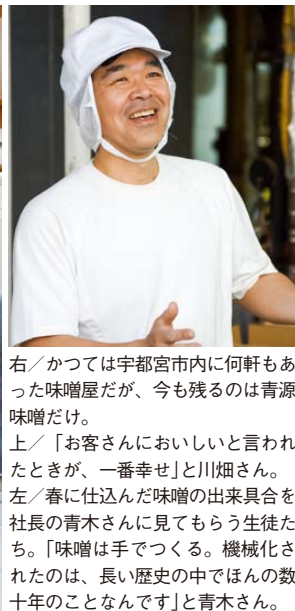


高校2年 脇阪彩乃さん  
味噌づくりのことなど、今まで気にしたことなかったもので、お話がとても新鮮でした。いろいろな職業の人に「仕事の魅力は何ですか？」と尋ねてみたいになりました。それだけでも、私の世界が広がりそうです。

## 人に喜んでもらえる仕事がしたい

高校2年 小川初音さん

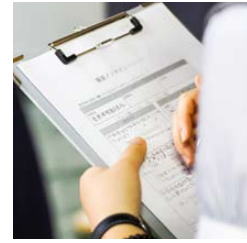
「良い味噌をつくって、お客様に喜んでもらうことがやりがい」という言葉が印象的でした。私は、美容系の仕事に興味を持っているのですが、仕事で人に喜ばれることって、とても大切なんだなと思いました。



右/かつては宇都宮市内に何軒もあった味噌屋だが、今も残るのは青源味噌だけ。  
上/「お客さんにおいしいと言われたときが、一番幸せ」と川畑さん。  
左/春に仕込んだ味噌の出来具合を、社長の青木さんに見てもらった生徒たち。「味噌は手で作る。機械化されたのは、長い歴史の中でほんの数十年前のことなんです」と青木さん。

**自分を支えてくれる地域から描き出す自身の将来像**  
今年の春、宇都宮キャンパスでは青源味噌に依頼し、生徒を対象とした「味噌づくり教室」を開いた。そのときに仕込んだ味噌のできばえを見てもらうためにこの日、生徒たちは味噌樽を携えてきた。講師を務めた社長の青木敬信さんが味噌を利く。「なかなか良い具合ですよ」と青木さん。それから生徒たちとの対話に

かった。川畑さんは、この工場に勤めて10年になるが、その前は婦人服の縫製の仕事をしていたというのだ。  
「私はものづくりが好きなんです。婦人服と味噌では畑違いに思えるかもしれませんが、ものをつくる仕事なのは同じ。精魂込めてつくったものが、お客様に喜ばれたときのうれしさが仕事のやりがいです」  
おお、職人ってカッコイイ！



「味噌は1300年以上の歴史を持つ食品です。先人たちが、何度も失敗を繰り返しながら今の製法に到達したのです。味噌は、日本人の知恵の結晶だと思います」  
生徒たちはその言葉に真摯に耳を傾ける。川畑さんの話も、青木さんの話も、この授業がなければ学校ではまず聞く機会がないものだ。  
ソーシャルトリアルは、このジョブシャドウイングを入り口として、地域の人に仕事について講話をもらう「夢授業」や、地域のボランティア活動の実践などへと展開する。  
この日の授業に同行した、キャンパス長の矢口牧子先生は、「今日の授業は、私自身も楽しめました。生徒たちの胸に響く言葉がたくさんあったと思います」と語った。  
自分を取り巻き、その生活を支える社会の実像に触れる授業。生徒一人ひとりが、自身の将来を考えるうえで貴重な体験となるはずだ。

## 子供は社会から学び、社会が育てるもの

青源味噌株式会社 代表取締役社長 青木敬信さん

第一学院高校からお話をいただいたとき「良い取り組みだ」と思いました。現代では、学校と地域社会が隔てられていますが、本来、子供は社会から学び、社会が育てるものだと思います。ソーシャルトリアルはそれができるカリキュラム。素晴らしいと思います。  
私たちの仕事は、どうすれば良い味噌ができるかを日々考えて、ジタバタしているようなもの。でも、その現場を生徒たちに見てもらい、ものづくりの良さを何かしら感じてもらえたらうれしい限りです。  
生徒たちは、するどい質問をしますね(笑)。驚きましたが、それも楽しい。生徒たちの訪問は、私たち自身が仕事を振り返るよい刺激になります。



ジョブシャドウイング 同行ルポ

## 地域が教室、働く人が先生

# 「ソーシャルトリアル」で未来の自分が見えてくる

広域通信・単位制の第一学院高等学校では、「地域全体を学校と捉えた教育「コミュニティ共育」というキャリア教育に力を入れている。その一環である「ソーシャルトリアル」は、たくさんの大人とのふれあいを通じ、将来の自分の姿を具体的にイメージしていく取り組みである。同校宇都宮キャンパスの「ジョブシャドウイング(職場観察)」に同行した。

**働く人の観察を通して仕事と社会を知る授業**  
担任の先生とともに、4人の生徒が街を行く。目指すは青源味噌株式会社。宇都宮で300年続く老舗の味噌蔵だ。今日は「ジョブシャドウイング」の授業で味噌の工場を見学する。皆、少し緊張した面持ちだ。広く地域の人々から学ぶ「ソーシャルトリアル」のひとつとして行われる「ジョブシャドウイング」は、職場

や働く人の観察を通して、仕事や働くことの実感を体感するのが目的だ。第一学院高校は通信・単位制の高校。通信制高校とは、中学卒業後、何らかの事情で高校に通えなかった生徒、また、芸能やスポーツなどの夢と学業の両立を目指す生徒が、自分に合ったカリキュラムで高校卒業を目指すための学校である。ともすれば社会と疎遠になりがちな生徒たちに、実際に地域に出て人や仕事に

なつた。  
「味噌は1300年以上の歴史を持つ食品です。先人たちが、何度も失敗を繰り返しながら今の製法に到達したのです。味噌は、日本人の知恵の結晶だと思います」  
生徒たちはその言葉に真摯に耳を傾ける。川畑さんの話も、青木さんの話も、この授業がなければ学校ではまず聞く機会がないものだ。  
ソーシャルトリアルは、このジョブシャドウイングを入り口として、地域の人に仕事について講話をもらう「夢授業」や、地域のボランティア活動の実践などへと展開する。  
この日の授業に同行した、キャンパス長の矢口牧子先生は、「今日の授業は、私自身も楽しめました。生徒たちの胸に響く言葉がたくさんあったと思います」と語った。  
自分を取り巻き、その生活を支える社会の実像に触れる授業。生徒一人ひとりが、自身の将来を考えるうえで貴重な体験となるはずだ。

**ものづくりの魅力を生徒の言葉で聞く感動**  
ひと通り工場を見学したのちの質問タイム。「従業員数は？」「生産量は？」といった内容で始まった質問が、どんどん深みを帯びていく。  
3年生の小野口征吾さんが質問する。「味噌づくりとは何ですか？」。これには川畑さん「ウーン」とうなった一言では語りようがない。しばし考えたのち、「人づくり」だと答えた。「同じつくり方をしても、味噌の味はつくる人によって微妙に違うんです。仕事だからしかたないという気持ちでつくと、それなりのものでいい味噌にならないです」  
味噌を愛し、より良いものにしたと思う人間にならないと、味噌がへそを曲げる。だから「味噌づくりは人づくり」だというのである。「どのくらいこの仕事をしているのですか？」という2年生・小川初音さんの質問からは、意外なことがわ



# 地域全体を 学校と捉えた教育 コミュニティ 共育

私たちの生活は、たくさんの人と仕事に支えられて成り立っている。しかし、普段それがかえりみる機会はありません。第一学院高校の「地域全体を学校と捉えた教育「コミュニティ共育」」は、地域と連携しながら、それを実感する機会を生徒たちに提供するカリキュラム。「ジョブシャドウイング」「夢授業」「ボランティア活動」で構成されるソーシャルトライアルで社会の仕組みや働くことを知り、自身の将来を考えるきっかけとしたいと考えている。同時に、「地域宣伝隊」としての活動を通して、地域に対する愛着の情や地域貢献の意識を育むことも目指している。

## 夢授業 (しごと講話)

**地**域の方を学校に招き、自身の仕事について話していただく授業。仕事の内容はもちろん、業界事情や仕事上での苦労・苦心、やりがいなどを聞く。

高校生の年代では、職業の名前は知っていても、具体的な業務については知らないことが多い。その職業がどのように成り立っているのか、またその職業の社会的な意義などを、リアルな語りから感じ取っていく。

ジョブシャドウイングの受け入れ先の方が、夢授業の講師になることもある。地域の大人との関係が深まるたびに、生徒たちの地域への愛着も深まっていく。



講師の話をさまざまに感じながら、真剣に耳を傾ける。心に残ったこと、仕事に対する考え方を。生徒の心に言葉がしみこんでいく。



## ジョブシャドウイング (職場観察・仕事観察)

**働く大人を見て、将来の「働く自分」をイメージしていく**

**職**場と、そこで働く人の姿を観察する授業。地域の企業や店舗、医療福祉施設などの協力を得て、生徒たちが現地に赴く。実際に仕事を体験する場合もある。たくさんの大人と接点をもつことで、働くことや仕事の内容に興味・関心をもてるようになり、将来の「働く自分」をイメージしていく。実施にあたっては、事前にその職業や事業者について下調べをし、グループで質問項目を検討するなどの準備をする。また、実施後は、



普段の生活では見ることのできない、業界・職場の裏側まで見学。夢が膨らんだようだ。



学んだことは振り返ってプレゼンテーション。社会に出て必要となる力も同時に養っていく。

観察・体験を振り返るグループワークを行い、その成果をまとめて、受け入れ先の方々も招いて発表する場を設けている。

## ボランティア活動

**地域に貢献する活動を通じ、「他者貢献」の大切さを知る**

**街**に出て地域の方々と、あるいは独自にボランティア活動を行う。授業の一環として行う場合もあるが、活動を強制するものではない。サークル活動のようなかたちで取り組んでいるキャンパスもある。活動を通して、自分たちの生活が地域に支えられていること、自身も地域社会の一員であることを自覚する。そして、「自分以外の人を喜ばせる幸せ」が、自分の喜びにつながることを学んでいく。



自分たちがたくさんの人に支えられていることへの感謝の気持ちが芽生えてくる。

## 地域宣伝隊

**地域を探究し、地域を知り、地域への愛着を深める**

**地**域探求」の授業は、近隣の商店や企業を訪問し、地域でどのような活動が行われているのかを調べていくものだ。あわせて地域の歴史や風土など、地域全体の調査も行い、その上で「地域マップ」の制作や、「地域のたか

らもの(歴史・景勝地・名所・名物・名産品)」を全国のキャンパスで共有していく。これらを通じて、地域の一員であることの自覚と地域貢献の意識、自分たちが育っている地域への愛情を育んでいく。



たくさんの地域の大人から学んでゆく。

理事長  
インタビュー

**たくさんの大人のふれあいや様々な実体験が、生徒の「自己肯定感」を育てる**

第一学院高等学校 理事長 生駒富男さん

当校が教育の根幹として最も重視しているのは「自己肯定感」を育むことです。私たちはまず、生徒のありのままを受容・共感し、受け止めることから始めます。大人に肯定された生徒は肯定してくれたい大人を受け入れ、自分のことも、そして自分以外の人のことも肯定できるようになります。自分を肯定し、他者も肯定する。そして、他者への貢献を通じて「もともと自分も好きになる」自分づくり、「もつ

ともつと尊敬できる」自分づくりができるようになるのです。私たちはこのことを、「自己肯定感教育」と呼んでいます。

**将来にチャレンジする大切さを知る**

当校ではキャリア教育として、地域全体を学校と捉えた教育「コミュニティ共育」に力を入れています。実はこれも、自己肯定感を育むことと密接に関係しています。

現代の子供たちの生活は、家庭と学校が中心となり、地域とのかかわりが希薄です。それが子供の社会性を損なわせている一因といわれています。子供の成長には多くの大人と出会い、かわりを持つことが大切で、いわばその体験の積み重ねが、子供を大人にするといっても過言ではないでしょう。

## キャリア教育情報サイト「かけはし」に注目!

日本青少年キャリア教育協会(<http://www.npo-ace.org/>)が運営するキャリア教育情報サイト「かけはし」には、中学校・高等学校で実施されている、特に地域を教育リソースとしたキャリア教育事例が紹介されている。教育現場におけるキャリア教育の充実を図るとともに、地域と社会に広がるネットワークとなっている。



第一学院高校の事例も紹介されているキャリア教育情報サイト「かけはし」。

●キャリア教育情報サイト「かけはし」  
<http://www.ace-kakehashi.org/>

「ソーシャルトライアル」は、その一環として取り組み始めたカリキュラムです。

地域には、専門的な知識、技術、職能を持った方々がたくさんおられます。その方々と触れ合うことは、生徒のみならず、教員にも新鮮な刺激を与えます。また、ご協力くださる地域の方々からも、ご自身の仕事を通して教育に携われることを喜んでいただいています。

自分と未来を変えられるのは、自分でしかありません。生徒たちには、この授業を通して「自分以外の人を喜ばせる幸せ」が大切であることに気づくとともに、自分の将来に興味・関心を持ち、今を意欲的に取り組んでほしいと願っています。